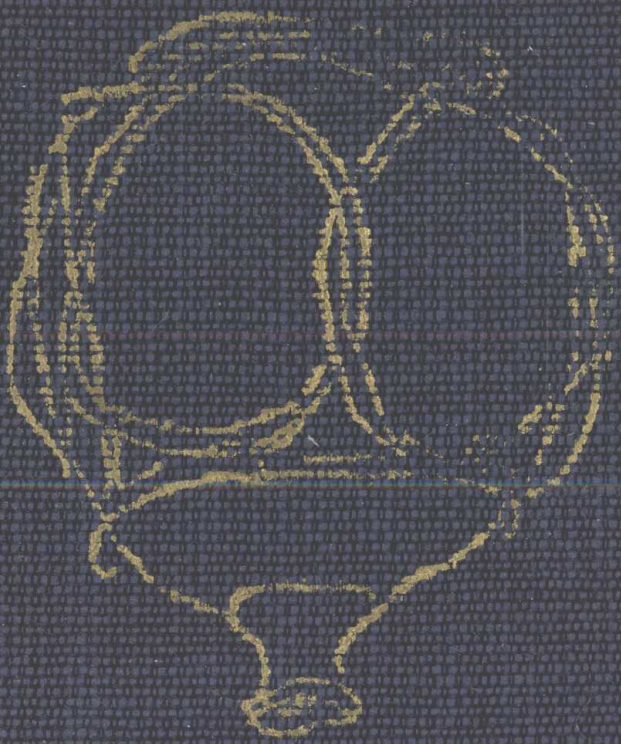


山之口貘全集　第四巻　評論

一九七六年九月十九日初版発行

著者山之口貘

発行者小田久郎

印刷所文唱堂

製本所美成社製本

発行所思潮社　東京都新宿区市谷砂土原町三―一五

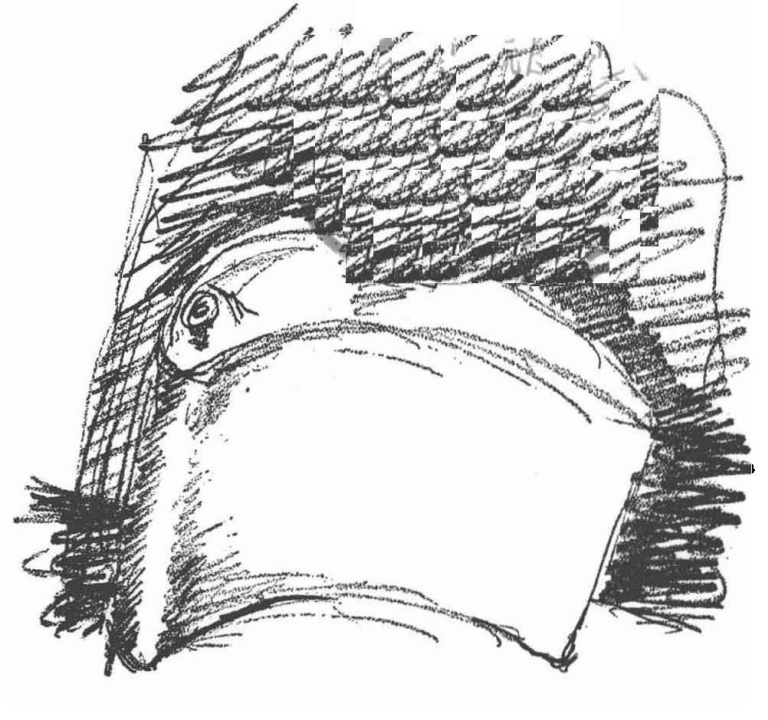
電話東京二六七局八一四一番（代）振替東京八一二一番

定価二〇〇〇円　1395-205004-3016

一口貘全集

第四巻評論

思潮社



山之口貘デスマスク　1963.7.
デッサン　大峰政敏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

梯梧の花

山之口貘

ぼくが、まだ、おっぱいをのんでゐたころ
のある日のことである。
[redacted]
母のおっぱいに吸ひついたのであ
つたが、
すぐに、おっぱいを喪ひ放して、ぼく
は泣き出してしまつた。
[redacted]
ぼくのことを高
乳させるために、母がその乳首のところに唐
辛をつけてあつた。がうなのである。
[redacted]
ぼくは、泣きながら、台所にあつた小さな水
桶を引き摺つて来て、その水に手をぬらして
は、母の乳首を懸命に洗つたことを記憶して
ゐるのである。だが、洗つてから、おっぱい
をのんだかどうかは、さっぱり記憶にはない。
[redacted]

山之口貘全集　第四巻　評論

目次

詩論

つまり詩は亡びる　一四
『朝鮮冬物語』によせて　一七
諷刺詩鑑賞　二〇
自作詩鑑賞　二四
現代詩講座選評　二九
バランスを求めるために　四六
「小名木川小学校文集」序　六八
詩とはなにか　六九

詩人論

岩野泡鳴論　八二
中原中也のこと　九五
逸見猶吉と　九八
淵上毛銭とぼく　一〇〇
『金子光晴詩集』解説　一〇五
池田克巳の横顔　一一七
金子光晴　心の友　一一八
高橋新吉覚書　一二〇
霜多正次　一三〇
変った人たち　一三三
佐藤惣之助と私　一三五
琉球の情緒に酔った詩人　一四〇
葦平と毛銭とバク　一四三
葦平さんとの縁　一四六
小伝　一四九

児童詩

希望　一三二
アカイ　マルイ　シルシ　一三三
オホゾラノ　ハナ　一三四
腕ずもう　一三五
バク　一三七
学年末の反省　一三九
雷とおへそ　一六〇
赤とんぼ　一六一
田園の復興　一六二
ひとりで……　一六四
正月の朝　一六五
はつゆめ　一六六
ひなまつり　一六八
阿蘇の春　一六九
ウォター・シュート　一七一
金魚　一七二
どんぐり　一七四
まつかさ　一七五
学校への道で　一七六
桜並木　一七七
みどりの五月　一七八
もう　すぐ冬だ　一七九
丸い　うで時計　一八一
あわてんぼう　一八二
うちのしろ　一八四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

沖縄

琉球の幽霊　一八八
「ひめゆりの塔」と沖縄調　一九三
祖国琉球　一九五
がじまるの木蔭　二〇一
沖縄　二〇五
沖縄と日の丸　二〇六
沖縄を思う　二〇七
ふるさと沖縄を思う　二一〇
ヤファラジューシー　二一五
梯梧の花　二一七
沖縄の叫び　二二〇
チャンプルー　二二九
沖縄悲歌　二三四
詩の島・八重山　二三八
気にかかる沖縄　二三九
正月の沖縄料理　二四二
黒美人小（グヮー）　二四四
方言のこと　二四六
沖縄　二四九
山羊料理　二五三
ゴーヤーの苦味　二五九
沖縄帰郷始末記　二六二
むかしの沖縄いまの沖縄　二六五
石垣島紀行　二七〇
沖縄　二七四

郷里沖縄への旅　二七五
沖縄はわが故郷　二七七
失われた青春の風土　二八四
沖縄の芸術地図　二八六
泡盛談義　二九七
風土と子ども　三〇一
沖縄　三〇三
白・黒の精進あげ　三〇七
ゴーヤー・チャンプルー　三一一
『詩と版画・おきなわ』序文　三一三
チャンプルー　三一三
沖縄の話　三一六
台風の季節　三三〇
沖縄は生きている　三三三
沖縄の豆腐・味噌料理　三三九
沖縄の雑煮　三四一
おもい出の泡盛　三四三
沖縄の海　三四四
いまはむかしの夢　三四五
矛盾の島沖縄　三四六
寄り合い世帯の島　三四九
沖縄よどこへ行く　三五七
仏桑花と梯梧　三六九
消え去った婦人名　三七一
梯梧の花　三七三

解説
食うこと詩を書くことをめぐって、六つの夜　鈴木志郎康　三七八
掲載誌紙一覧　三九一
年譜　辻淳編　三九六
参考文献　辻淳編　四〇四

詩論

つまり詩は亡びる

かつて、アンドレ・ジイドのソヴィエットへの関心を知るや否や、それを以て直ちに、赤化したアンドレ・ジイドと見なしたかのような観方をした人々が、日本の国にあったと記憶する。

彼等は、ジイドのソヴィエット旅行に就て、いよいよジイドが、ソヴィエットから土産として持って帰るものは、赤色ジイドに違いないと想像位はしていたかも知れないのであるが、さて、ジイドの帰りを迎えて見れば、振ら下げて来たものは、相変らず彼の批判や感想やらにまつわりついているソヴィエットからの痛烈な非難であった。

いま、再び世間は、旅行帰りのジイドに就て、色々の検討をなし騒ぎ立てているのにもかかわらず、その声達のなかには、どうしたことか、かつてジイドを赤化したのであるかのように見なしていた彼等の声がきこえないのだ。いま、彼等はどこにいてどのようにジイドを観ていることか。

それを僕が知りたいわけは、かような機会に於てこそ、外国人の所謂、「日本的観方」という日本の姿を見なおして見たいそのためにだ。

これもまた、ジイドの赤化云々が伝えられたその頃のことだった。或る新聞で、或る日本人のジイド訪問記を読んだのであるが、その日本人が、ひとりのフランス人氏同伴でジイドを訪ねての帰

途に、ジイドも先ずあの莫大な財産を清算しなくてはなるまい、というような意味のことを言ったことに対し、フランス人氏は立ち所に、それは日本的考え方だよ、とか言ったという。

僕は、そのフランス人氏の言葉の指ざしているこの日本に、ひとつの思想的傾向を帯びるや否やあの莫大な財産を清算したかつての有島武郎氏を思い出した。

もうひとつ、これも日本的というものであろうか、どうせ食えない時代だから、食えないことを覚悟の上で、文学に精進するのだという作家の心構えだ。そういう心構えはフランスあたりに流行していたのであろうか。そのような作家をいながらにして見せつけられるということは、日本の文学の意気地なさが感じられる。食えない覚悟まで文学のために持たなくてはならぬのだから日本の作家は痩せ細って死んでしまう傾向がある。食えない覚悟を文学のために持つだけのほんとうの勇気があるならば、食えない時代のためになぜ食う覚悟を持たないで、しかも文学を舐めてばかりいるのだろうか。

時代が食えない時代だから、食えない覚悟で、文学の消費は、ジイドを舐めヴァレリイを舐め相当に行われているにもかかわらず、その生産面に於ては彼等の比でないと考えられようが、それは仕方がないと答えることによってすますつもりでいるのだろうか。

ファンク博士はその手記で、仕方がないということを、日本人の特長として挙げていたようだ。

この時代が、食えない時代であるということを、ほんとうに自覚しているならば、食う覚悟、そ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com